

Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。



ニッチな世界を選び、
人生をかけて勝つ

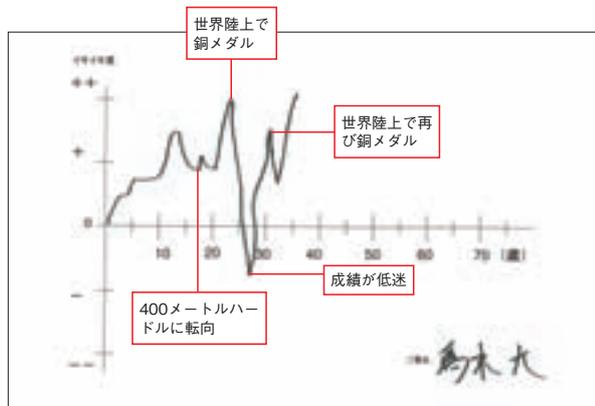
為末 大氏 Tamesue Dai

元プロ陸上選手

Career History

為末大氏の キャリアヒストリー

1978年	0歳	広島県生まれ。8歳で陸上を始め、中学時代には短中距離選手として活躍。中学3年のとき、ジュニアオリンピックの200メートル走で当時の日本中学記録を更新した
1994年	15歳	広島県立広島皆実高等学校入学。高校3年秋、100メートル走から400メートルハードルに転向を決意する。広島国体で同種目の日本高校記録(当時世界ジュニア歴代5位)を樹立
1997年	18歳	法政大学経済学部入学。在学中に日本学生選手権400メートルハードル3連覇を達成。大学4年時にはシドニーオリンピック出場を果たす。翌年にカナダで開かれた世界陸上選手権大会(世界陸上)では、銅メダルを獲得
2003年	24歳	1年半の大阪ガス在籍を経てプロに転向。翌年にはアテネオリンピックに出場(予選敗退)
2005年	27歳	世界陸上で再び銅メダルを獲得
2008年	30歳	北京オリンピックで予選敗退となるが、現役続行を表明。ロンドンオリンピックを目指し、アメリカに練習拠点を移す
2012年	34歳	日本陸上競技選手権大会(6月)を最後に現役引退。現在は主宰する一般社団法人アスリートソサエティ、「為末大学」などを通じ、スポーツを軸に社会や教育を考える活動を幅広く行う



直筆の人生グラフ。「競技成績を基準に書いたが、ピンチのときこそ活力が湧いたりもする。充実度は必ずしもこの通りではない」と為末氏。

400メートルハードルの日本記録保持者(2013年10月現在)・為末大氏。世界陸上選手権大会で2度の銅メダルを獲得し、3大会連続オリンピック出場も果たした。2012年6月に現役引退後は、「議論のできる日本人」を育てるためのプロジェクト「為末大学」の立ち上げや著書の執筆など幅広く活動。アスリートとしての経験に裏打ちされた説得力のある発言が注目されており、ツイッターのフォロワー数は17万人を超える。

世界で勝つために、戦略的に考えて 400メートルハードルの選手になった

もともとは短距離走の選手だった。子どものころから足が速く、中学3年のときには200メートル走で同年齢時のカール・ルイス選手を超えるタイムを記録。だが、高校に入ると身体の成長が止まって記録が伸びず、高校3年の県大会でついに1歳下の後輩に負けた。

「さらに、世界ジュニアという大会で僕よりも速い選手たちが予選落ちしていくのを見て、自分はどんなに努力しても短距離走では世界に勝てないと思いました。では、どうすれば世界で勝負でき、生き抜けるのかと戦略を練り、400メートルハードルへの転向を決意したんです」

400メートルハードルを選んだのは、体格の不利な日本人が勝てる「ニッチな種目」だと分析したからだ。

「競技人口が少なく、陸上競技で一般に活躍が目立つ黒人選手もあまりいない。また、ハードルは踏切地点に正確に足を合わせるのがポイントなのですが、僕には世界レベルの選手でも無駄な動きをしているように見えました。技術や戦略を工夫すれば、自分がメダルを獲るのも夢ではないと考えたんです」

身体能力の低下をはねのけ、 世界陸上で2度の銅メダルを獲得

400メートルハードルに転向後、手ごたえはすぐにあった。高校3年の秋に出場した国体で日本ジュニア新記録をマークして優勝。大学進学後はハードラーとして名を馳せるようになった。

「当初は短距離走選手をあきらめたことへの敗北感を抱え続けていましたが、大学4年でオリンピック(シドニー大会)に初出場したころから吹っ切れました」

脂がのってきたのはそれからだ。シドニーオリンピックでは予選敗退したが、その悔しさをバネに翌年の世界

陸上（カナダ大会）では、日本人として初めてトラック種目で銅メダルを獲得。世間の注目を浴びた。

「ところが、満足感から成績が低迷し、自分が世間から忘れられた存在になっていくのを感じたんですね。それがとてもショックで『もう一度、みんなをあとと言わせたい』と奮起し、練習方法も見直しました。その結果、27歳のときに再び世界陸上で銅メダルを獲れたんです」

その後、30代になるまでの数年間が「競技者としての自分のピークだった」と振り返る。

「僕の身体能力は10代後半がピークで、タイムは23歳がピーク。でも、経験を積んで精神力や技術、戦略などの総合力が高まり、走り方を理解したのが20代後半でした。金メダル獲得に最も現実味を感じていたのもこの時期。当時、僕は世界でいちばん400メートル走と400メートルハードルのタイム差が少ない選手で、技術は頂点に達していました。あとは走力を上げてタイムを0.4秒から0.5秒縮めれば、金メダルを狙える。そこに望みをかけ、走力アップに専念するために、1年あまりハードルを跳ばないという思い切った策も講じました」

だが、29歳で出場した世界陸上（大阪大会）は予選敗退。翌年の北京オリンピックでは一次予選落ちし、引退も考えたが、「まだ走りたい」という思いは消えず、4年後のロンドンオリンピックを目指して現役続行を決めた。

競技を引退しても、 一番になることはあきらめない

現役最後の4年間はアメリカに拠点を移して練習に励んだが、ケガに泣き、試合にはあまり出場できなかった。「選手生命の最期が見えてくると、自分は世界を意識するのが遅かったと感じました。アメリカの選手は幼少期から世界を目指しますが、日本人はまず日本一を目指し、そこに到達して初めて世界一という山に気づくので、グローバルスタンダードに適應するまでに時間がかかってしまう。僕の場合、10年ロスがありました」

引退試合となった2012年6月の日本選手権では、ハードル1台目で転倒してしまった。呆然としたが、立ち

上がって再び走った。

「僕には初出場したオリンピックで転倒し、ゴールはしたものの、あきらめて全力を出さなかった苦い思い出がありました。だから、絶対にあきらめたくなかった」

結局、組最下位に終わり、悔しかったが、最後まで走り切ったことで晴れやかな気持ちが残ったという。

「30歳を超えてからは競技者として急速に衰えていく自分と向き合い、もがき苦しみました。でも、その状況を受け入れてなお走り続けられたことは、引退後の自信につながりました」。また、引退の1年ほど前から「なぜ走るのか」という根本的な問いに立ち返ったのもよかった。「僕が走るのには、一番になって世の中を驚かせたい、みんなの意識を変えたいという気持ちに端を発している

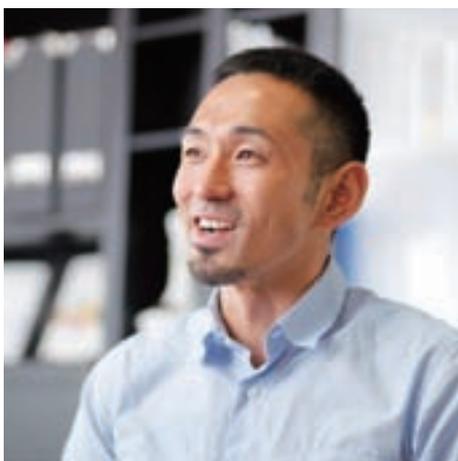
と気づき、その目的を達成する手段は陸上だけではなく、無限にあると思うようになったんです」

引退後は進路を模索するため、1年半と期限を定めて既述のような幅広い活動を意図的にしてきた。その期限が迫り、道が見えてきた。

「一番になることはあきらめていないので、自分が勝てるニッチな世界を探してきました。最初はスポーツとは異なる分野も考えましたが、経験を活かしたほうが勝ち

やすい。今は『スポーツ社会学』という分野に可能性を見出しています」

まだ具体的な形にはなっていないが、後進育成のプログラム作りなどいくつかのプロジェクトが既に動いている。「あとはそれを『食っていけるシステム』にすることが課題」と話す。だが、ハードラー時代の為末氏はプロ選手としてマネジメント会社の力も借りながら、自らスポンサーを募って活動資金を得、競技を続けてきた。特定のコーチをつけず、常に自分で戦略を立てて戦ってきたことも知られている。「経営者」としての才覚もあるに違いない。今後の活躍が楽しみだ。



2013年5月発行の『諦める力—勝てないのは努力が足りないからじゃない』（プレジデント社）

考えること哲学者の如し 行動すること経営者の如し

大久保幸夫 リクルートワークス研究所 所長

為末氏を「走る哲学者」と表現した人がいる。なぜ、そのようなニックネームがついたのだろうか。風貌も1つの要因だろうが、最大の理由は、「本質」「根本」を常に自分自身に問いかけているからではないか。「なぜ勝ちたいのだろうか?」とよく自問していたという。ふつうはどう勝つかを考えるだけで、勝ちたい思いの根本に何があるかまでは突き詰めたりはしないものだ。その個性は、アスリートを引退して次のキャリアを考えるという現段階で、とても役立っている。引退の延長線上には、コーチしか浮かばない人が多い。あるいは目標を見失って、不本意なセカンド・キャリアを歩む人もいる。しかし為末氏は、「なぜ陸上を始めたのか?」という原点まで立ち返ることができたから、「世の中を驚かせたい」「みんなの意識を変えたい」という軸を見つけて、陸上にこだわらずに将来を想うことができたのだろう。

一方、計画を立てて実行に移す段階は、まるで経営者のようだ。100メートル走をあきらめ、400メートルハードルに種目を変更したのは高校生のときだが、このときの戦略的思考は素晴らしい。「なぜ400メートルハードル?」の質問に対して、彼は当時考えたことを明確に回答

してくれた。「ハードルを練習するグラウンド環境が整備できるのは先進国だけ。そのためアフリカ勢の脅威にさらされない」「トップランナーでも、ハードルを跳ぶ前の踏切に10センチ前後のブレがある。これを改善すれば闘える」、そして「競技人口が少なく選手の層が薄い」。だから、400メートルハードルだったというのだ。

引退を決意したときに立てた計画も出色だ。アスリートが引退したときに与えられる賞味期限を1年半と判断した。なぜなら、オリンピックでメダルを獲った選手の名前を一般の人が覚えている期間がそのくらいだから。だから自分も1年半は、さまざまな機会をもらえるはず。その間になんでも経験して、試行錯誤して、それから結論を出そうと決めたのだと言う。

このような戦略的発想と行動は、哲学者のものである。アスリートのものである。経営者のものだろう。

アスリート。哲学者。経営者。3つの顔を覗かせる為末氏。そして、彼のオフィスで向き合っている話をしていると、アスリートやタレントではなく、ビジネスパートナーと話をしているような気分になるのである。

為末氏の思考プロセス

